

フラ・アンジェリコ 《サン・マルコ祭壇画》

—主祭壇画としての機能に関する一考察—

芹澤 なみき（愛知県美術館）

1443年の公現祭の日、フィレンツェのサン・マルコ聖堂は教皇エウゲニウス4世の立ち会いのもと、ドメニコ会厳修派の聖堂として新たに献堂されることとなった。その主祭壇に設置されたのが、同じ厳修派の修道士であったフラ・アンジェリコ（1395頃-1455）による《サン・マルコ祭壇画》（1438-1442）である。

先行研究は専ら、サン・マルコ聖堂を活動の拠点とするドメニコ会厳修派の視点や注文主であるメディチ家の視点から、宗教的、世俗的、政治的要素が重層的に組み込まれた祭壇画としてこれを論じてきたが、本祭壇画にみられる特異な図像は、必ずしもこれら2つの視点から説明できるものではない。そこで発表者は、フィレンツェ社会において同聖堂が重要な役割を担っていた公現祭に着目し、この日フィレンツェで行われた「マギの祝祭」との関係からこれらの図像の特異性を検討する。

同聖堂と公現祭の結びつきはすでに先行研究で論じられているものの（Hatfield, 1970ほか）、祭壇画の図像にみられる公現祭の影響を具体的に論じる研究はほとんどなかった。管見のかぎりジェルブロンは、個々の図像と公現祭やマギの祝祭との関わりを指摘して、これらの図像が公現祭とゆかりの深いメディチ家の偉業を称揚するためのものであると解している（Gerbron, 2016）。しかし、同聖堂と公現祭の結びつきは以前から存在しており、必ずしもメディチ家のみには帰されるべきではない。

発表ではまず、メインパネルに描かれた薔薇の花綱、幼子イエスが手にする球体、両開きのカーテンなどを取り上げ、これらの図像に認められる祝祭性や東方性といった要素を分析する。次に、コジモ・デ・メディチの守護聖人が描かれた一連のプレデッラに着目する。プレデッラの背景にはシニョリーア宮とサン・マルコ聖堂が具体的に描きこまれており、それらが祝祭行列の出発点と到着点に一致することのほか、公現祭ひいてはサン・マルコ聖堂とシニョリーア（フィレンツェ政府）との結びつきが暗示されていた可能性があることを指摘する。さらに、かつてシルヴェステル修道会が聖堂を所有していた時の主祭壇画であるロレンツォ・ディ・ニコロの《聖母戴冠》（1402）にも中央プレデッラにマギの礼拝が描かれていることに着目し、同聖堂の主祭壇画が以前から公現祭との密接な関わりを有していたことを示す。

以上の考察から、アンジェリコは《サン・マルコ祭壇画》に公現祭や現実の祝祭行事の要素を描き込むことによって、フィレンツェ社会における同聖堂の存在意義を観者に周知するという主祭壇画としての機能を付与しようとしていたと考えられる。彼は他の祭壇画でも特定の場所を示唆するモチーフを描いていることから、本祭壇画に描かれた公現祭を想起させる図像もまた、設置場所の特性を描き込むというアンジェリコの創意によるものであった可能性を提示したい。